

# 第5学年 教科「おおたの未来づくり」学習指導案 (総合・国語・社会、合科)

日 時 令和4年1月25日

第5校時 13:35~14:20

対 象 第5学年3組 28名

授業者 ○○ ○○

## 研究主題

地域とともに生きる児童の育成  
～地域財発掘からのカリキュラム開発～

### 1 単元名「米の可能性を考えよう」【A 製品の開発】(20時間扱い)

### 2 単元設定の理由

本校には1aの田んぼがあり、5年生が米作りを行うという伝統がある。矢口小学校に通う児童は、これまで5年生が田んぼで米作りを行う過程を見ているので、米作りに対する意欲が高い。今回はその米作りを終えた5年生が、その知識と経験を生かして未来に向けた米の生かし方を、米の製品プロフェッショナルである「亀田製菓」と連携し、社員の方のフィードバックを受けながら考えていく。亀田製菓は新潟県新潟市に本社がある、地域に根差した企業である。商品開発の際にも、地域に根差した視点を持ちながら、社員が手を取り合い協働しながら商品開発を行う社風だ。また、2022年に米菓中心の事業から脱却し、より未来を見据えた「グローバル・フードカンパニー」を提唱した。この亀田製菓から、地域に根差した商品開発の視点や、社員が手を取り合い協働していく姿勢を学び、小学生ならではの柔軟な発想を用いて、未来に続いてく米の可能性を広げた商品の提案を行い、大田区に還元していく。

大田区には広い土地と、様々な年齢層の人々、それに応じた公共施設が充実している。中でも学校近隣の矢口商店街、安方商店街も児童との繋がりが深く、児童に対して大田区に愛着をもってほしいという願いをもっている。児童らは、前述したような米製品を作る過程を通して大田区の特色を自ら学び、土地に対する親しみを感じながら「大田区に向けた未来の米製品」として自らの考えをよりブラッシュアップしていく過程を経験していく。この経験により、地域に愛着をもち、地域とともに生きる児童を育成していきたい。

### 3 単元の目標

米を育てたり勉強したりすることで理解した性質をもとに、未来に向けた米の活用可能性を広げて商品を提案し、協力企業の方と共に開発する活動を通して、相手を意識した視点を獲得し、地域や相手に寄り添いながら自らの考えを提示することができる。

#### 4 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元 の 評価 規 準	① 商品開発のプロセスやコンセプトにあったデザインの仕方を理解している ② 創出した製品の価値を分かりやすく伝えることができる。	① 何をデザインするのか、何のためにするのかを意識し、解決に向けた見通しをもっている。 ② 関係者からのフィードバック等を生かして、製品化に向けて試行錯誤している。	① 企業の方の話の中で得た知識をもとに、友達と考えを共有しながら協働して課題解決に取り組もうとしている。
ICT の 活 用	① ICT を活用した情報収集や、スライド作成の基本的な事項を身に付けている。	① 効率性やわかりやすさ等の視点をもって効果的ICTを活用している。	② モラルや他者意識をもってICTを活用しようとしている。

#### 5 使用する教材

##### (1) 連携企業

- ① 亀田製菓...全体的な授業計画支援、フィードバック

##### (2) 使用教材

- ① Google Chrome...企業提示用スライド作成
- ② 検索エンジン ...米を使った製品調べ、大田区についての情報収集
- ③ まなびポケット...データの共有、提出

#### 6 指導観

##### (1) 単元観

社会科単元「わたしたちの生活と食料生産」の小単元「米作りのさかんな地域」では、気候の特色を活かした米作りや、米作りの農家の工夫、これからの米作りの課題等について学習した。また、その後の小単元「これからの食料生産とわたしたち」では、我が国の食料自給率が驚くほど低く、食料の安定供給が外国頼みであることに衝撃を受け、農業従事者人口や耕地面積の止まらない減少傾向、食品添加物や遺伝子組み換え作物、農薬・化学肥料過多による食の安全性の問題等、様々な課題があることに気付いた。

5年生は、本校の特色ある教育の一つとして、校庭にある1a（100㎡）の広さをもつ田んぼで、米作りの体験学習「お米プロジェクト2022」と題して、1・2学期を通じて取り組んできた。4月から自分たちで田起こし・田植えをして心を込めて育ててきた。途中化学肥料や農薬は一切使わず、有機肥料だけで最後まで育て上げた。10月に無事収穫し、11月に手作業で脱穀・精米までした。家庭科「めざせ！いきいき食生活」の単元では、お米の炊き方を学び、12月に最後、自分たちで育てたお米を炊いて食べた。あまりの美味しさに驚いて

いた。

本単元は、これからの米作りの課題やお米の可能性を考える発展学習として、主体的で対話的な深い学びにつながるものである。上記の「お米プロジェクト 2022」を 1st シーズンと捉え、本単元を 2nd シーズンと位置付けている。1st シーズンでの経験や学びと、社会科「わたしたちの生活と食料生産」での学びを土台として、これからの米作り農業の発展について、消費者や生産者の立場から多角的に思考する中で、株式会社亀田製菓との出会いとご協力によって、お米のもつ可能性について自由に発想し、商品開発につなげていこうとするのが、本単元の学習である。将来の米作り農業の発展、食料自給率の向上に寄与するような深い学びになることを期待している。

## (2) 児童観

男子 14 名、女子 14 名。児童同士の仲が良くグループ活動に意欲的に取り組むことができる児童である。授業内で積極的にグループ活動を取り入れることで、納得のいかないところは一人一人が意見を出し、全員が納得して話し合いが完結するように指導を行ってきた。児童は、思ったことを言い合い、全員が話し合いに参加するという姿勢を身に付けることができた。また、ICT 技術に長け、8 割以上の児童が疑問に思ったことをすぐに調べたり、自分の意見をスライドにまとめて全体に発表したりすることができる。

その一方で、児童が自ら課題を見出す姿勢が確立していないという課題点が見受けられた。日常生活の中から課題を見出し、課題解決のために提案を行うプロセスを国語科「よりよい学校生活のために」や、社会科「未来の自動車コンペティション」などで二学期中に経験を重ねてきた。この活動により、児童が課題を見出し、自分の意見を大衆に向けて発信することを臆さずに行うことができるようになった。

本単元ではその先のプロセスの経験を積むことを目的としている。前述した過程で養った力をもとに、意見を発信した後のフィードバックを企業に行っていただく。そのフィードバックをもとに、自分の考えを独善的なものではなく、他者や地域を意識したものという視点で深めていきたい。その際に、ICT 技術を活用して、より最新の知識を得たり、効果的に見える手法で考えを提示したりすることができるよう、指導を行っていく。

## (3) 教材観

本単元は、学校にある田んぼと実在する企業、そして ICT 機器が教材となる。児童がこれまでの「お米プロジェクト 1st シーズン」で培った経験や経験を通して考えたこと、調べて分かったことを基に、学習を進めていく。これからのお米の可能性について、児童自身が考えを出し合い、商品化するためのプロセスを Google スライドにまとめ、最終的に「亀田製菓」という実際の企業にプレゼンを行う。

第一に、児童は 1~2 学期間「お米プロジェクト 1st シーズン」として、田んぼを作る活動から脱穀までの作業をほぼ手作業で行い、米の性質を理解するとともに、米に対する愛着も養った。その経験や感じた課題を基に、児童が「お米で未来を切り開く方法」を考えて提案する。そして、第二に、実際の企業からフィードバックを受けることを起点として、大田区という土

地への愛着を自覚すると共に、大田区に向けた商品開発という視点で自らの意見をよりブラッシュアップしていく。

## 7 単元の指導計画と評価計画（20 時間扱い）

過程		時	・学習活動	※指導上の留意点 ●協力企業などの参画 ☆具体的な評価規準
一次	コンセプト設定	1	・お米でどのようなものが作られているか、インターネットで調べる。	☆食料生産にかかわる人々の工夫や努力と、その土地の自然条件や需要を関連付けて、未来に向けた商品開発に向けた人々の働きを考え、自己の考えを加えて表現することができる。（社会/思考判断表現） ☆商品開発のプロセスやコンセプトにあったデザインの仕方を理解している。（知識技能） ☆何をデザインするのか、何のためにするのかを意識し、解決に向けた見通しをもっている。 （思考判断表現） ☆創出した製品の価値に応じて、伝えたいことを明確に表すことができる（国語/思考判断表現）
		2	・お米の性質についてインターネットで調べる。 ・まだ商品になってないオリジナルの商品アイデアを考える。【Catch】	
	発想・設計	3	・グループを作って、グループの中で、前時までの情報を共有し、グループとしてオリジナルの新商品のアイデアを考える。	☆原稿からスライド化する際に、原稿の重要な部分に線を引いて、スライドに入れる文字をわかりやすく表す。 ※スライドは 1 枚につき 100 文字以内、24pt 以上で作るように指導する。
		4	・ワークシートに準備する。 【Trial】	
		5	・ワークシートをもとに、プレゼン用の原稿を作る。 ・プレゼン原稿の中で大事な要素を抽出して、スライドを作る。 ・グループのプレゼン準備、練習をする。 【Trial】	
		6		
		7		
		8		
		9		
		10		
		国語		
二次	創出・発信	1 1	・協力企業の話聞く。 【Event】	●プレゼンテーションを協力企業に見ていただく。
		1 2	・協力企業に対して、グループごとに 1 回目のプレゼンを行い、アドバイスをいただく。 【Feedback】	●プレゼンテーションをもとに「地域に対する商品」という視点でフィードバックを行っていただく。

	発想・設計	1 3	・協力企業のアドバイスを受けて、何を行うか計画を立てる。 【Check/Adjust】	☆創出した製品の価値を分かりやすく伝えることができる。 (知識技能)
		1 4	・大田区の地域の特色について調べる。 【Check/Adjust】	☆協力企業の話の中で得た知識をもとに、友達と考えを共有しながら協働して課題解決に取り組もうとしている。
		1 5 本時	・協力企業のアドバイスを受けて、「大田区に向けた製品」という視点で商品開発のアイデアをブラッシュアップする。 【Check/Adjust】	(主体的に学習に取り組む態度) ☆関係者からのフィードバック等を生かして、より簡単に書いたり重要な部分を詳しく書き加えたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。(国語/思考判断表現)
		1 5 1 6 1 7 国語	・2度目のプレゼンに向けてグループごとに準備する。 【Check/Adjust】	※大田区には様々な立場の人々や施設、地域があることを理解させる。
三 次	発想・設計	1 8	・協力企業に対して、グループごとに2回目のプレゼンを行い、アドバイスをいただく。 【Feedback】	●協力企業に大田区に向けた製品のプレゼンテーションを聞いていただく。 ☆創出した製品の価値を大田区に向けた製品という点を加え分かりやすく伝えることができる。 (知識/技能)
		1 9	・本単元で学んだことを、グループごとに振り返る。 ・全体でふり返り、単元のまとめとする。	☆協力企業の話の中で得た知識をもとに、友達と考えを共有しながら協働して課題解決に取り組もうとしている。
	まとめ	2 0	・協力企業にお礼の手紙を書く。 ・協力企業からマイハッピーターンを受け取る。	(主体的に学習に取り組む態度) ☆関係者からのフィードバック等を生かして、製品化に向けて試行錯誤している。(思考判断表現) ※2度目のプレゼンのフィードバックは改善した点を褒めることを中心に行うよう依頼する。 ※人と関わった際にはその人に感謝の心を持ち、それを伝えることが重要であることを理解させる。

## 8 研究主題に迫るための手立て

### (1) 研究の経過（高学年分科会の常時活動の取り組み）

#### ①単元計画としての C-TEFCUS サイクルの導入、活用

日頃から様々な教科にわたって、矢口小学校「C-TEFCUS サイクル」を導入し、児童が自ら見通しをもって学習をできるように指導を行っている。また、C-TEFCUS サイクル全てではなく、教科や児童の実態によってその一部のみを反復するなど変則的な活動も取り入れた。

（めだかの繁殖…Check→Trial 未来の自動車の提案…Check→Trial  
よりよい学校づくりのために…C-TEFCUS）

#### ②授業ごとの C-TEFCUS サイクルの導入、活用

児童が見通しをもって繰り返し学習に取り組むことができるように、単元計画とは別に、授業毎に C-TEFCUS サイクルを意識した授業計画を立てるように指導を行った。

#### ②ICT 機器の積極的な活用

「矢口小学校情報機器活用能力表」に則り、正しい情報リテラシーをもとに、日ごろから情報機器の活用に努めている。

##### ・プレゼンテーションソフトの活用

…社会科を中心に調べたことや自分の意見を発表する際に「Google スライド」を活用している。

##### ・ノートアプリケーションの活用

…児童の意見集約・共有する際にスクールタクトやムーブノートを活用している。

##### ・まなびポケットの活用

…日頃からチャンネルを使い画像を共有したり、班内の意見を記録したりしている。

##### ・アンケートアプリケーションの活用

…投票を行ったり、意見をまとめたりする際にアンケートアプリケーションを活用している。

##### ・Adobe アプリケーションの活用

…校内ポスターやクラスの掲示物を作る際に活用している。

### (2) 本単元における手立て

#### ①問題解決サイクルを基にした教科横断型カリキュラムマネジメント

矢口小学校「C-TEFCUS サイクル」を単元の中に意識的に組み込むことにより、児童が異なる教科においても見通しをもって自発的に活動が行うことができるようにする。

C (キャッチ)	課題の発見
S (サクセス)	成功のイメージをもつ
T (トライオール)	考えうることをやる
E (イベント)	トライした結果起きること
F (フィードバック)	自問自答する。他者の意見を聞く
C (チェック)	考えたことが妥当なのか
A (アジャスト)	調整、試行錯誤
S (サクセス)	ひとつの成功、または失敗してもその方法では難しいことがわかるので成功となる。

②C-TEFCUS を基に児童が自ら各授業の見通しを立てる

毎授業ごとに、児童が中心となって、授業のはじめに「めあて」と「授業計画」を立てる。このことにより、児童が学びに向かう意欲を高めると共に、見通しをもって計画を実行する姿勢を学ぶことにもつながる。

③他者や地域を意識した商品開発を行う

商品開発していく過程で、商品を提供する先のことや、提供先の地域（大田区）の特色を理解し、それに応じてより製品をブラッシュアップしていく。独善的なものではなく、商品を通して地域や他者とコミュニケーションをとることができる人材を育成する。

(3) 本時における手立て

①本時が学びサイクル【C-TEFCUS】のどこにあたるのかを意識する

授業の初めに学びのサイクルを確認し、単元の大きな流れのどの地点にいるかを意識する。

②児童が自らめあてを決め、授業計画を立てる

児童が中心となって、授業のはじめに「めあて」と「授業計画」を立てる。このことにより、児童が学びに向かう意欲を高めると共に、見通しをもって計画を実行する姿勢を学ぶことにもつながる。

③大田区の特徴を理解し、商品開発の手立てとする

前時で学習した大田区の特徴をふまえて、開発した商品の特徴と照らし合わせて商品をより良い物にしていく、

9 本時 (15/20)

(1) 本時の目標

関係者からのフィードバック等を生かして、大田区に向けた製品という視点で、商品をよりブラッシュアップしていく。

(2) 本時の展開

	○主な学習活動 ・児童の反応	◇評価 ・留意点
導入	○本時のめあてを確認する。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">           亀田製菓さんのアドバイスをもとに            大田区に向けてアイデアをブラッシュアップしよう         </div>	
展開	○グループごとに亀田製菓さんのアドバイスを振り返る。  ○商品開発のアイデアを「大田区に向けた商品」という視点でブラッシュアップする。 ・工場が多いから、工場働く人に向けて売りたい ・学校が多いから、学校近くで売りたい	・Google スライドを活用して、考えを共有したり、役割を分担させたりする。  ◇関係者からのフィードバック等を生かして、製品化に向けて試行錯誤している。(観察)
まとめ	○本時の成果を学級全体で振り返り、班ごとに次時の見通しをもつ。	・それぞれのグループに報告をさせ、修正の見通しをもたせる。

(3) 板書計画

<p>めあて</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">           亀田製菓さんのアドバイスをもとに            大田区に向けてアイデアを            ブラッシュアップしよう         </div> <p>授業計画</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文章に追記する</li> <li>・ 班で進捗報告をする</li> </ul>	<p>Adjust (調整) の視点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・</li> <li>・</li> <li>・</li> </ul>	<p>C-TEFCUS サイクル</p>
--	--	--------------------------

(4) 授業観察の視点

- ・ 学びサイクル【C-TEFCUS】を意識できる授業展開であったか。
- ・ 児童が自ら授業の見通しをもち、課題を解決しようとしていたか。
- ・ 大田区の特徴を理解した上で、製品をよりブラッシュアップすることができたか。